

## クロストーク 2 部： | 公共空間活用におけるコンテンツ開発とプレイヤー発掘 |

コーディネーター：田坂 逸朗 氏（広島修道大学 ひろしま未来協創センター）

パネリスト：宋 俊煥 氏（若者クリエイティブコンテナ代表）

尾崎 信 氏（松山アーバンデザインセンターディレクター）

若狭 利康 氏（NPO 法人セトラひろしま理事長）

奥原誠次郎 氏（うらぶくろ商店街振興組合副理事長）

（田坂）ここからは、本人お断り無く、着座でやらせてください。クロストーク第 2 部ということで始めたいと思います。皆さん、どうかよろしくお願ひします。

第 2 部のクロストークのファシリテーターということで、仰せつかった時に、私が色々なアイデアを持ち込んでしまい、今、実行委員会の皆さんは、一体どうなることやらと不安な気持ちになっていらっしゃると思います。そんな時に、事前ディスカッションをやりたいという声掛けを頂き、この 4 人には事前に一度集まって頂きましたので、今日が実は二度目であります。一度目の時に「さあ話そう」と、一通りやってみました。ただし、その事前ディスカッションをやった折に、最後の最後に、私から「一回忘れてください」とお伝えし、「5 月 8 日は、新しい気持ちで場に臨んで、そして是非第一部を受けて、そこからこの 80 分という時間の中で、何かく広島流のエリアマネジメント」というようなものが見えてくるような、そういう創造的な時間が過ごせたらいいのではないか」という投げかけをさせて頂いております。自己紹介の形を取らせて頂ければと思います。

ソン先生から、まずは一通り簡単な自己紹介を 4 人連続してよろしくお願い致します。

### 暫定利用でまちなかの魅力を向上。コンテナとしばふ広場で構成された多世代交流スペース

（宋俊煥氏 以下、宋）私は、ソン・ジュンファンと言います。この通り日本人ではなく、韓国の者でございます。約 10 年前に日本に来て、大学でエリアマネジメントに近い研究をしています。その前はずっと東京にいたのですが、4 年前に山口県宇部市に来ました。「若者クリエイティブコンテナ(YCCU)」が今日の話ですが、所属は山口大学です。

若者クリエイティブコンテナがなぜ出来たのかと言いますと、（スライド上の）この手前にある民地をしばふ広場として活用し、その回りにコンテナと一緒に整備することで、まちなかの魅力をあげようという動きの中で生まれました。広島からは約 160 km 離れておまして、今まで 1 部の話を聞くと非常に羨ましいなあと思ったのですが、ここは人口 16 万人くらいで、人口規模が非常に少ないところです。中央町エリアというところですが、戦争の時に被害を受けておらず、ごちゃごちゃのまちがそのまま残っています。その周りはある程度区画整理事業が行われており、幅広いところが出来たりしているのですが、この中央町エリアはそんな風にはなっていないという特徴がございます。

皆さん、宇部興産（という会社）をご存知かと思いますが、工業都市といったところが（宇部市の）特徴です。その中に、このようにコンテナとしばふ広場で構成された多世代交流スペースという小さなものがある。広島と比べると非常に小さなまちでございます。この課題としては、2005 年に大きな第 1 次の区画整理事業が行われ、1 回成功したこともあり、そんな中でまちなかをどうにかしようという事。第二次の区画整理が上手くいかないというところで、小さなことからスタートしようというところで取組んでいます。まちではイベントをやっており、基本的なコンセプトの話をする、今空き地がスポンジ状で増えており、その中で、民地、民間の敷地の一部をとにかくしばふ広場にし

て、暫定的に利用することで地区の周りのポテンシャルを上げていこうと。それでも、その地主さんが建物を建てたいという土地利用の意思があれば、もう一回土地利用を促していこうということです。それでまた芝を広場にしていっていったものは、新しく（土地利用を）転換していこうということコンセプトとして色々な活動をしていることが宇部市の特徴でございます。

（田坂） そうですね。皆さん、こんなボリュームで自己紹介をしたいという感じですね。沢山しゃべりたい方々のお集まりですからね。順次お願いしても良いでしょうか。

### 行政と民間と大学が連携のコアに。小さなまちなか拠点を使いこなした「交わる」取組

（尾崎信氏 以下、尾崎） 松山アーバンデザインセンターの尾崎と申します。どうぞよろしくお願い致します。松山アーバンデザインセンターが、今日登壇されている方々と一番違うのは、行政がそもそも、枠組みの中に入っているということだと思います。行政と民間と大学が連携のコアとして作ったものがアーバンデザインセンターです。実態としては、専門家が4名ほど常勤スタッフとしており、私もその一人です。事務所は、まちなかの空きビルだったところを改装したものです。

どういう活動をしているかと言いますと、色々やっていますが、その中の一つとして「交わる」というテーマで、まちなかの賑わいを作ることを行っています。この点だけ簡単にご紹介して、自己紹介を終わりたいと思います。先ほど申し上げた事務所の1階が、「もぶるテラス」というスペースです。「もぶる」とは、伊予弁で「交わり合う」という意味です。市民のための交流スペースで、誰でも無料で使える場所です。その斜め向かいには「みんなのひろば」という、コインパーキングを広場にしたりした場所があります。この2つの拠点を使って、ミニコンサートや映画の上映会など、色々なイベントを行っています。この仕掛けは、うちでアルバイトをしている大学生や、我々がやっている「アーバンデザインスクール」という市民講座の受講生と企画を考えながら、我々の組織が運営しています。

こんな感じで沢山やっています。我々としても、まちなかの小さな拠点を使いこなしながら活動しているのですが、第1部のように、まだ稼ぐ仕組みを作るところまではいけていません。今は、純粋に若い力を借りながら、まちなかに賑わいを取り戻すとともに、取組みを通じて、若い方々のまちづくりへの意欲を高めることや、そのノウハウを身に付けることを一生懸命やる、というところを中心に活動内容として進めております。

### 「線から面へ」、市民と商店街を連携した市民団体による賑わい創出と環境整備

（若狭利康氏 以下、若狭） セトラひろしまの若狭と申します。私は、セトラひろしまのNPO法人の理事長をやっております。実を申しますと、セトラひろしまの市民団体は仮の姿というか、そちらともう一つは、広島中央区の商店まち振興組合連合会の専務理事という、商店街の活動の顔と2つの顔を持っております。中振連は、“線から面への活動”ということで、一商店街ではできない活動を連合会でやることを目的に、1992年に出来たものでございます。

その後、バブルがはじけたことで商店街の中心部で活動していた青年部が危機感を持ち、このままでは色々なことができないという時に、ちょうど、「ひろしま春祭り」のメンバーとボランティアが集まり出来上がったものが「セトラひろしま」というNPOでございます。NPOが出来たことにより、商店街だけでは出来ないアート・文化・賑わいづくり・環境整備などの活動が出来るようになったと

いう状況です。活動エリアは広島を中心部で、八丁堀地区と紙屋町地区が合わさった四角いエリアの中です。

先ほど1部で登壇されました「(紙屋町・基町)にぎわいづくり協議会」のメンバーも、この中振連の中で活動している状況でございます。私達も、中振連の管内ということでございます。中振連というのは、商店街の環境整備事業・賑わい促進事業・インバウンド事業・子育て支援などの活動を行っております。

環境整備の一番大きい事業は、駐車場システム共通駐車券を発行し、お客様が車で来られた時に、無料の駐車券を差し上げることがメインの事業でございます。一番目立っておりますのが、賑わい創出事業です。例えば、6月に広島で400年近く続いている稲荷参という祭りを支援する「浴衣できん祭」というお祭りを実施しており、30万人が集まります。広島に原爆が落ちた8月6日の夜には、70年近くの間、商店街のものがボランティアで灯籠流しを行っており、それを今、中振連が引き継いで実施しております。最近始め取り組みとして「広島ファッションウィーク」があります。これは、広島のPARCOさんが始めたものを中振連と一緒に、今は紙屋町のそごうさんといった大型店の方も一緒に取組んでおります。そして11月には、広島で410何年続いている「えべっさん」というお祭りを支援するお祭りを実施しております。

こういった賑わい創出事業がありますが、その中で今、アリスガーデン周辺では「アリスガーデン改修検討委員会」を立ち上げました。アリスガーデンは、広島PARCOさんと広島お好み村の間にあるポケットパークで、金座街再開発事業の際にPARCOさんと一緒に誕生しました。主にイベント活用をしています。

一時期は、暴走族が集まり大変なことになっていましたが、市民・行政・警察の三者で集まり、何とか暴走族を追い出し健全に使うということで、我々も市民グループとして、セトラひろしまが集まりイベントをやっていますが、20数年経ち老朽化してきたので、何とか綺麗にしたいということで、現在勉強中ですがパークPFIやエリマネの手法を使い、官民連携で綺麗に整備したいと考えています。そして、去年から検討委員会を立ち上げ、キャッチコピーを考えたり、事業者の方にも入って頂き設計もして頂きました。左半分が上から見た図です。今は屋根がないのですが、屋根を付けていつでも使えるように、貸出についても考えています。

NPO法人セトラひろしまは、市民と商店街を連携したまちづくりの市民団体です。「セトラ」というのは、「セントラルエリア」の略でございます。ボランティアですが、ガーデニングやイベント、芸術・アートなど色々な特技を持った専門家の集まりです。そういったものが集まり、寄り合い状態ではありますが、行政や商店街、市民を繋ぐ、繋ぎ役のような形でやっております。活動としては、賑わいプロジェクトや環境整備事業、グリーンプロジェクト、文化交流、子育て支援、今日のシンポジウムも事務局として、この中の何人かが手伝いに来てくれています。

その中で、今回、注目して頂きたかったのが「大イノコ祭り」です。これは、セトラがやっているのではなく、最初商店街でやったお祭りを若者たちが引き継ぎ、自分たちの手でやってくれています。それをセトラがお手伝いしています。この中には、アートもあり、賑わいもあり、そして大学生も入った交流があり、色々なことをやっております。公園の真ん中に88本の竹を立てて、竹の張力で1.5トンの石を吊ります。広島にある「イノコ祭り」を巨大化したものですが、非常に綺麗なお祭りでございますので是非来て頂ければ。11月に行いますが、こちらがお祭りをやった次の週には、お隣のうらぶくろさんが、トランクマーケットをやられます。全く真逆のイベントですが、各々の特徴を生かしてやっております。

## 広島のおへそから商店主によるまちづくり団体が発信する広島で一番おしゃれなキラークンテンツ

(奥原誠次郎氏 以下、奥原) うらぶくろ商店街振興組合の副理事長をやっております、奥原と申します。今日はお呼び頂いてありがとうございます。広島の方はご存知だと思いますが、袋町という広島市のど真ん中で、まちづくりを地域の方々と一緒に10年前からやり始めております。広島以外から来られた方は、ちょうど広島市のど真ん中、本当におへそみたいなところに位置しています。真北には中国地方最大規模の通行量を誇る本通り商店街という、大動脈のようなアーケードがあり、その南側50mくらいに位置します。細い通りを中心にした商店主が集まり、10年前からまちづくりをしている団体でございます。

我々、そこのまちづくりを10年続けて来ており、今日の第1部でも先進的な事例を沢山見させて頂きましたが、凶らずも、我々も全国に負けじと、あるいはもっと言うと、他でもない“世界の広島”なので、世界中に有名な、この広島らしいまちづくりを、このおへそのようなところから皆を巻き込みながら、都市再生推進法人を目指して本格的にエリマネという形で戦略的にまちづくりをやっていこうと取り組んでおります。

なお、今のところ、一番のキラークンテンツは年に2回程実施する、公園を使うマルシェイベントです。2日間に渡って約2万人が小さな公園に集まるのですが、これが全国で評判を頂いております。商業の高度な技術やリーシング技術を使い、あまり公園で扱わないようなリーシングをしながら、おそらく広島で一番お洒落な祭り・イベントが出来ていることがまず1つのコンテンツとっております。また後程詳細は説明させて頂きます。今日はどうぞよろしくお願い致します。

(田坂) 自己紹介の後に、少し質問から入ろうと思っていましたが、打ち合わせ段階では、真ん中辺りにたっぷりコンテンツを紹介する時間を作りますという事でした。やはり、どうしても人間は用意してくるともうそれを吐き出すまで、次のことに進めないものですので、まずは是非吐き出してください。そして、そこからクロストークを作っていきたいと思っております。

第1部の皆さんが非常に大きな大局観を持ち、「一体、エリアマネジメントの実相は今どうなっているのか」ということを幾つもお示しく下さいました。あるいは、「課題があるのだ」と、いうこともお示しく下さっています。第2部の皆さんは、コンテンツというところが一つの足掛かりになっています。「どんなコンテンツなのか」、そしてそれが、もしかしたら第1部で示された課題に対する答えになっているのか、なっていないのか、あるいは「プレイヤーってどうなのか」、皆さん自身がプレイヤーであり、「もう十分プレイヤーはこの世に満ちています」という事なのか、それとも次の課題があるのか、ということ深く掘っていきたく思っています。4人の方は中四国という括りの中で、松山・宇部・広島のお二人という構成で、お互いの感覚や、その場での発言をここでクロスさせていきたく思っています。対話という言葉も使っています。「そうか、そうなのか」と、評価もせず、人の話を聞いていると「これだ!」というものが内面から浮かんできた、という状態を対話と呼んでいます。

クロストーク第1部を聞いて、率直な感想を一言ずつ頂きたいと思っております。600人の前で壇上に座って言いにくいこともあるかもしれませんが、もし、4人が口を滑らせて何かしら批判めいたことがあった時は、それはあくまで途中経過であり、考え事の経過で出てきたこととしてお許しを頂きたいと思っております。

第1部、いかがでしたか?何か受け取れるものがありましたか?「この部分は、もう即、明日から

生かす」ということがあれば、それを、あるいは、「更なる疑問が深まったぞ。いやいや、そうは言っても、それはこうじゃない、私の活動からは」と言えるものがあれば、少し1部を振り返りながら2部を作っていきます。今度は、逆の順番で奥原さんからお言葉頂いてもいいですか。

**(奥原)** 1部はしっかり目の前で聞かせていただきました。我々のまちづくりは、まちづくりと言っても目の前の通りを賑やかにしたいというレベルで必死にやっているだけなのですが、正直、あまり全国のネットワークや他地域の事例をしっかり勉強したり、他の事例の視察に行き勉強したりしていない割には、正直申しあげて、同じことを考えているなというのが、率直な本音です。

それは図らずも、恐らく頭の良い役所の方々が、あるいは国の方々が、様々なトレンドの中で新しい制度をどんどん考え改正を行い、整備をされているということもあるのですが、そんなことは、我々はプレイしていて全然知らないです。正直あまり興味がない。問題は、やはり我々が何をどんな形でどんなまちをつくるのかということ、なんとなくシンプルに描き、それをやるための方法論として描いていくと、図らずも第1部の方々が先陣を切って色々な地域でやられているところ、幸いにして同じようなことを考えているなということ、強く感じました。

**(若狭)** 本当に他地域の方もお話聞いて感心したのですが、まずエリマネというものの自体を私たち実際よく分かっていなくて、今回その勉強も兼ねて来ているのですが、その中でエリマネとは3つの要素があると感じました。1つはまず「誰がやっているか」、「組織」です。それから「どういう活動をしているか」ということ。そして「そういう考え方なのか」、「エリマネという考え方」。この3つの側面があると思いましたが、活動自体は今、奥原さんも言われたように聞いていると同じようなことはやっている。だが考え方のレベルがちょっと違うなど、私は思いました。

僕らの活動は、私たちがやってきた商店街の中で、または市民の活動の中でという限られた中で、「できることをできる人間がとにかくやっつけよう」と、今まで20年間突っ走ってきました。そうではなく、今聞いていると名古屋の方も福岡の方も、御堂筋の方は特にそうですが、まずビッグプランといった大きな構想がある。そういったものがあり、それに向かって段階的に進んでいってしやる感じが、やはり違うなあと感じました。“札幌広福の中で、福岡はもう札幌広福じゃない、もう世界の福岡だ”と、そこが違うのだなとつくづく思いました。

やはり僕らも、そういう大きな考えを持って構想を立てて進んでいかななくては、これはエリマネどころではない、そんな感想を持ちました。

**(尾崎)** 名古屋、栄の事例が松山にちょっと似ていると思いました。似ているポイントとしては、“社会実験を皮切りにアクションを起こしてみる”ということで、これは松山もよくやっています。先ほどご紹介した広場もテラスもどちらも、市役所がやっている社会実験の事業です。その管理運営を我々がやっており、社会実験で「まずはやってみようよ」、それでどうなるのかデータを採り、結果を見ながら地域の方とアクションを始めてみようというところが似ていると思いました。

また、デザインと連動させているということも近いです。我々も常勤スタッフにデザインの専門家が何人かいて、例えば通りのデザイン、広場のデザインなど、色々なデザインと活動を連続させて考えていこうというところが似ていると思いました。

一方、刺激的というか勉強になったのは福岡の事例で、公平性を考えた負担金の設定をされているところです。そのあたりを実は松山では悩んでいます。やはり地域の方、行政の方もそうですが、あ

るイベントをやるときに、「このイベントでコーヒーを売ったら近くのコーヒー屋さんに迷惑じゃないのか」といった、公平性をものすごく重んじた結果、イベントの企画内容にストップがかかる事が結構あります。これをどう突破していけばいいのかということに悩んでいまして、それをきちんと受けとめた上で、「皆、これで公平だよな」というのを作った事例が福岡ではないかと思って聞いていました。一方で、忽那さんの大阪の事例では、「そんなもの突破してしまえ。やらないことの責任を君らは取れるのか」と、ある種開き直っていくやり方もあるのかと、そちらも勉強になりました。1部で、「これはなるほど」と思ったことは、公平性についてです。

(宋) 宇部市ですが、こちらは広島と福岡の話にもありましたが、その通りの中にある町で、皆に聞いても「山口は通ったことはあるが行ったことはない」、というのが普通の答えです。そのように、人が魅力を感じられるところがあまり多くない、言えば常盤公園くらいです。実は、宇部市民の中でも「魅力的」、あるいは“ここが良いいよ”と言われる自慢話ができるようなところがあまり多くないということが、宇部市の大きな課題としてありました。

放っておけば工業都市の後背地として発達してきたのですが、駅周りについては、立地適正化計画の中で都市機能を誘導しなければいけない重要なエリアである。その中でここに魅力を作っていくなくてはいけないということを考えた時に、商業だけでは埋まらない、アクティビティをとにかく拠点として作っていくなくてはいけない。しかし、その担い手として誰がいるかと考えたときに、やはり学生ではないかという事になりました。

宇部市の中には、山口大学工学部・医学部、また宇部フロンティア大学の他にも、意外と色々な中学校高校があり若者がいっぱいいますが、その若者が何処にいるかわからない。皆が何処で遊んでいるか聞くと、家の中で遊んでいるという事で、それは本当にもったいない、どうにかしないとけないということで、学が入り、公民学連携で活動を進めています。

名古屋市などは新陳代謝が結構良いというお話でしたが、ここは全くゼロです。商店街は、力がどんどんなくなってきており、直接市と民間が繋がってやるのが難しい中で、補助金を使ったりして、仕掛ける側として、仲介役として山口大学、「学」が入り、若者目線、あるいは学生が入ることで、少しよそ者が入ってきたような新しい視線が町中に入ることで、いま新しく活性化をさせようとしている所です。実は1年半くらいしか経ってなくて、最初にやったときはプレイヤーが全然いなかった。町中に誰もいないという感じでしたが、やっていくと、どんどん出てきます。町中で、面白い人ややってみようという人が出てきて、そういう人たちを、うまく繋げて何かしようとしているところです。

(田坂) もう一巡くらいしてみます。「コンテンツとプレイヤー」という話になっている感じがします。もう一度4人の方に発言をもらいたいと思います。ファシリテーターの機能の6割くらいは板書係りです。板書の中で、もしかしたら何か捕まえられるかもしれないので。

実は600人もの方がこの会場にいながら、会場に入って以降、一言も言葉を発していないという状態が3時間以上続いているとしたら、そこにこそ広島エリマネの極意が眠ってしまっている可能性があります。ですので、のちほど少しだけ会場の皆さんもクロストーク第1部がどうだったか、そして第2部の4人の皆さんの要素出しはどうか、ということ周りを座っている近所の人と感想のやり取りをしていただく、時間を取ればと思います。

その前にあと5分、壇上の4人の話に耳を傾けていただければと思います。「アクティビティをや

って見たら面白い人が出てきた」とか、あるいは「ゲリラにせよ社会実験にせよ、やれることを今やる」という考え方と、もう一つは「ビッグアイデアからいくというのは、確かにそれがないと付け焼刃をずっと繰り返していることになるんじゃないか」という思い。つまり、「こんなコンテンツとプレイヤー」、そして「“今”なのか」「ビッグアイデアなのか」という2つの議論軸のようなものが、ここには出てきている気がします。

さあ、「それまでの皆さんはどうだったのか」という、これまでのご経験、あるいは、今感じたことがあればもう一巡お願いします。

**(奥原)** 今の話もいただいた上で思うことは、ビッグプロジェクトと申しますけれども、やはり広島はおそらく地球上において20世紀最大の事件が起きたところであり、と同時に20世紀最大の奇跡みたいなものが起きているわけです。住んでいる人はあまり気がついていないのですが、そういうものを押し売りしたいわけではなく、要するにそれはリソースの塊でしかない。蓋を開けてみると、昨今の内外客、とりわけ海外からのお客様の寄り付きようといったら、それはアジアの人よりもはるかに欧米の人の方が多く圧倒的な知名度がある。ところがまちを振り返ったときに、ハード整備、例えば1949年、爆弾が落ちた恐らく4~5年後には丹下健三さんの建築デザインで資料館ができ、イサムノグチさんデザインの橋を架けた。

今、そんなスケールのまちづくりの感覚を果たして持てているかということ、恐らく持てていないし、振り返って今ハードを見たら、名古屋とも大阪とも福岡とも岡山とも、そんなに変わらないハード整備になってしまっていると感じる。要するに、ちっぽけなところからでもいいが、まちづくりを意識するなら小さなプレイから、あるいはコンテンツから入っていかなくては全くだめなのではないか。それを実証させるためには、小さな実績を一つずつ積み重ね、行政だけでなく市民の皆さんの信頼を勝ち得ながら、市民主体で少し尖ったというか、ある意味で良い主体性、強い主体性の中でまちづくりをする今まさにタイミング、社会の風潮になっているのではないかと思い、第1部のことは聞いていました。

**(若狭)** 広島の特性を生かすというのは、実は僕らのように中にいると難しく、どうすればいいのかと考え込んでしまいます。昔から広島でよく言われるのは、「平和じゃ飯は食えない」ということなのですが、今でも平和を目指してたくさんインバウンドの方が来られている。これを取り込まなければとは思いますが、なかなかそこはうまく見つかっていない。というのも、実はジレンマとして持っています。

私たちが活動してきたのは、色々な危機感からです。昔を振り返ると、何年も前に西部の商工センターというところにアルパークという大きい商業施設ができるので、何とかしなければいけないということで、皆で結束して始めました。今は、つい先日、西の山の上のほう（広島市佐伯区）にジ・アウトレットというイオンの大きな施設ができたことで、一緒にやっている事業者の皆さんは大変な危機感を持っています。広島はどうなるのか、中心部はどうなるのか、潰れるのではないかと、という危機感を持っている、それが今この日、この場があると私は思っています。

この危機感をチャンスに変えると、先ほどの登壇者の方が言われたので、まさにその通りだと思っています。この危機感をいかにチャンスに変えるか、この日をきっかけにチャンスに向けていきたいと思っています。今日は特に行政の方もたくさん来られていますし、他にも建設関係の方や不動産関係の方、そういう方もいらっしゃる。そういう方と手を組んでこの危機を乗り越えていかなくては、

広島も中心部の地盤沈下で他の地方都市と同じようになってしまう、これをなんとか防がなくてはという気持ちでやっています。その中でエリマネをなんとかしたいということです。この辺で一緒にお手を携えてやりたいという気持ちです、もちろんうらぶくろさんも一緒にやります。よろしくお願ひします。

(尾崎) 今危機感という言葉が出ましたが、松山もまさに危機感の塊みたいところがあります。それゆえに、松山アーバンデザインセンターのような場所を作ったということでもあります。今、私が痛切に感じているのは、小さな今できることをやるというのと、大きなビジョンを作るというのを両方持ちながら進まない、うまくいかないのではないかとということです。

これは1部で伊藤先生も仰っていたと思いますが、我々がやってきた小さなプロジェクトは、4年くらいやってきましたが、地域の方々の信頼を得ることに成功しました。「彼らは一生懸命やっているから、彼らは信頼に値するチームだ」と、そういうことが成果として出てきたのですが、一方で、まちが持っている危機感に対してはまだ答えられていません。やはり「小さいプロジェクトをたくさんやって、この先本当に大丈夫なのか」という不安はまだ拭えない。

ですから、今年度最大の目標は「大きなビジョンをきちんと作る」ということを据えて活動しています。それをきちんと地域の方々に示せた時に、もう少し賛同者が増え、地元の大きな企業が参加してくれるのでは、と願いつつやっぺいこうと思っています。小さなプロジェクトは地域の信頼を勝ち得るためにはどうしても必要ですし、一方で大きな羅針盤のようなものを地域と共有しなくては、これから先のプレイヤーを増やしていくところが難しくなるという気がしています。

(宋) プレイヤーのお話をしますと、若者クリエイティブコンテナは、コンテナがある敷地は、宇部市から整備をしてもらい、もう別に地主さんがおり、民地ですが公的に活用しています。そこは、整備をした上で大学がマネジメントをする研究委託を受けております。カフェがあり、カフェは賃料が発生するのですが、大学では賃料を稼ぐ活動ができないので、それは別に宇部まちづくり会社に賃料を払い、それが宇部市に入るような形にしています。私たちは無償でコンテナを頂いております。

これ(若者クリエイティブコンテナ)全体のイベント企画等をしてはいますが、面白いのは、実はここでコンテナを作る動きを3年前に宇部市の方でやろうとした時に、その中のコンテンツがあまりなかったのです。佐賀県の「わいわい!!コンテナ」ではないのですが、そういうものを見た上で「こういったものを作ろう」となったようですが、その中に何が必要なのかについての議論はあまりされず、うまくいきませんでした。その中で何をやるかについて、やはり起業・創業するセンターを作るという事になったのですが、人が来ないところに起業創業センター作っても誰も来ないだろう、という地元住民の意見もありましたし。

現在のカフェのオーナーさん(富岡さん)は、宇部市の周りにレストランをはじめ4つの店舗を持っていて、この方が、この辺りでカフェをして人を集める、回遊できるような空間にしたほうがいいのではないかと言われました。僕もそういう意見を出していたのですが、手をあげる人間がいなかったもので、「僕がやる」ということで、この富岡さんという方がやることになりました。この方は、「I love hometown Ube」という宇部の出身の方で、「ないものに目を向けるのではなくて、あるものを生かしていく」「この商店街にはチャンスしか転がってない」という考えを持っている方です。先ほど危機感の話がありましたが、宇部市に対して20年前から危機感を持っていたそうですが、今は「もうチャンスしかない」、という考えを持った方です。イベント企画のこの方は、たまたま私のパパ友



で、幼稚園で会った方です。僕が後ろに座っていて、たまたま話かけたら宇部の出身で、宇部が大好きで、宇部をなんとかしたいと思っていた方です。

1部の話で「ふりかけのような人間」という話もありましたが、僕は宇部の出身ではないし、僕が仕掛けることよりは地元の誰かが動き、プレイヤーを育てないといけないという僕の考えもあったので、人を引っ張り、YCCUの学生というマンパワーと資金を出し、芝生広場の上でイベントをやっ  
ていこうとなりました。イベントにDJを呼んだり、道路を通行止めにしたりと結構評判がよかったです。普通にやっているお祭りとは違い、ちょっとおしゃれな感じで若者が集まれるようなことをやっ  
ていこうということで、実施しました。できるだけ安くするために、山大のトラックを借りて物を  
運んだり、若者は学生がいるので上からドローンで撮ったり、もちろん大学の人間なので色々なアン  
ケートをとり、次に繋げたりしております。

(スライドの) この方が宇部の市長ですが、宇部は人口が少なく16万人くらいのところなので、  
市との関係が非常に密接というか、話し合う機会が結構多いです。コンテナがあるからこそ出来たこ  
ともかもしれませんが、6人の学生メンバーとイベント企画方と一緒にコンテナをやっているのですが、  
今いろんな整備をやっている市の行政の人間と学生の仲が良くなったり、イベントをやっていると  
市長がすぐ来てくれたり、色々な話が直接聞けることが良さだと思っています。

その時は、若者クリエイティブコンテナが控室になり、DJが来ることや大きな声を出すことなど、  
内容にあわせて、必ず事前に「こういうことをやりますよ」と町内に説明にまわりながら、500円位  
のチケットを配布しています。そうすると、家にずっといるおばあさんおじいさんたちがイベントの  
時ちょっと出てくるんです。「何やっているの?」と「一緒に飲んだりすることができる?」と。  
ただ、これをやった1週間後に、他の芝生広場でイベントやった時には、事前の説明が効いていて、  
大きな声があった等の色々な苦情が来ているらしいです。やはり、周りの住民と一緒にやっている  
という雰囲気を作っていくということも非常に大事だと思っていまして、これ以外にもいろんなイベ  
ントをやっております。

(田坂)プレイヤーの話というのが、もしかしたらとても大事な話になっていくのかもしれませんが。  
エリアマネジメントとは、最終的には「どうやってまちの価値を上げていくプレイヤーを発掘し、そ  
して活躍のフィールドを作っていくのか」、そこに収斂していくお話のような気がします。

今日は、折角足を運んでくださり、なんと参加費2000円も払っている方々の集まりです。隣にも、  
同じく学ぼうという思いで、ここに足を運んでいる方がお座りになっています。知人とやって来た  
という人はそれで結構です。あるいは新しい出会いを求める人は、椅子の近くに知らない人がいるはず  
です。ちょっと会話をさせていただきたいと思います。

ここまでのクロストーク1部やこの2部で少しずつ現れつつある軸のような話、「広島、あるいは  
中四国はこれからどうしたらいいだろう」、「これから本格的なエリアマネジメントの時代がやっ  
てきた時に、『まだですか』と言われないうちに、中四国・広島はどうしたらいいだろう」、というこ  
とについて、5分間くらいですが会話をよろしくお願いします。その会話を受けて、最終的な局面を  
作っていきたいと思います。

では、隣近所の人と会話をお願いします。

## 【会場での話し合い】

(田坂) ありがとうございます。そして壇上の4人の方にもお願いをして、「会場を回り、どんな会話がされているのか耳をそばだてに行ってください」とお願いしたところです。フロアでもきっとエリマネ論議が交わされていたのではないかと思います。そしてそれは、壇上にいるかいないかは大きな差ではないと思われます。

広島のエリアマネジメントに関わる可能性のある、会場の皆さんの会話から、今日の壇上の4人はどんな感想をこの壇上に持ち帰ったのか、少し言葉を聞いて少しずつまとめ、総括に入っていきたいと思ひます。また奥原さんから良いですか?フロアの声、どんな声があったでしょうか?

(奥原) 色々話は私なりに感じてしているつもりですが、ちょっと話を聞いてみると、「いやいや、温度差があるよ」と。温度差というのは、例えば最初のトーク第1部でもそうですが、エリアマネジメントに参加している人には「大きな企業さんとして参画してくれている人」、「一市民の皆様」、「全くそれは関係なく自治会として参画してくれている人々」、「あるいは役所の人として参画する人」など、大きく目指すところは同じなのでしょうけれど、そもそもその温度差があり、そこを埋められるだけのコミュニケーションがあったらいいのではないかというお話がありました。誠にその通りだなとは思ひます。

でも、果たしてどうやったらいいのだろうと、立ち止まってしまいました。ただ、今のような問いについて1つだけ言えることは、私も一企業を営営し、企業にコミットした中でまちへ参加しているものの、企業に我田引水というか企業のためにやっている感覚はほぼゼロで、全くありません。そんなもの割に合わない。もっと言うと、時間もお金も持ち出します。

だけど恐らく、地域に、地域の営みの中にあつての、社会にあつての自分たち、会社で私個人であるという自覚のもとで参画せざるを得ないからやっているし、結果それがなんとなく自分の生きた実感にうまく辿りつく。やりがいというか生き甲斐というか、そういう事の中で一個人として、なんとなくそういう活動に熱心になり、勉強もするしコミットもする、何よりプレイもするところだと思ひます。最初の入り口はそれぞれ別々なのでしょうけれど、もう少しそれぞれ個人にとっての社会、社会におけるのそれぞれが、実は蓋開けてみるとみんなそれぞれ個人なので、個々が地域にいかにかコミットしていくかというところが、もう少しコミュニケーションできるといいかなと思ひました。

(若狭) 今の奥原さんと同じような話もちよつと聞いたのですが、まず1つが、エリマネをやっていくのにリーダーという引張る人が行政の方なのか民間の方なのか、どちらがいいのかと。行政の中のやる気のある方が、この中にもたくさんいらっしゃると思ひますが、部署が違ふためできないこと。1番の問題は、やる気があつて、その場所においても3年経つと移動してしまう。3年経つてやつと地域の方とも密接な関わりができて、「さあこれからだ」という時に移動してしまう、その「継続ができない」ということが根っこにあるという話がありました。

もう1つは、昨日の懇親会で聞いた話ですが、地域の中の企業のあり方、考え方として、エリマネの中でBIDとかありますが、お金を集めるやり方において、どういうメリットがあつてその負担金を出すのが、説明できないというか説得できない。本当は奥原さんのようなマインドを持った方ばかりがいらっしゃって、お金も出し時間も使ってくれる方がたくさんいらっしゃるればいいが、なかなかそうはいかない。その場合に、どう説得するのかということが、昨日から今にかけて出てきたとこ

ろです。

(尾崎) 「どんな話をしていましたか」とお声掛けした方は、エキキタのエリアマネジメントの関係者でした。その方は、「今この会場に半分ぐらいいるかもしれない広島の方、一般の方々がどうやったらプレイヤーになってくれるのかがわからない、そこがこのシンポジウムで少し明らかになってくるといいなあ」とおっしゃっていました。考えてみれば、奥原さんは一市民としてのプレイヤーになられたわけですが、そのモチベーションは何だったのかなとか、それが続いてきたのは何だったのかなと言う点が気になります。

(奥原) 僕も、とある団体でちょっと訓練を積んだというところもあるのですが、何よりも結果やり続けられているのは、要するに最後は「人との繋がり」です。今から「まちづくり」なんていっても30年も50年もかかります。先ほど、トランクマーケットと自慢げにいいましたけど、365日のうちのたった4日ですから、そんな断面で盛り上がったところで、で何？となりますので非常に切ないです。

ただ、今日もそこに仲間が来てくれていますが、10年も15年もかけて同志が生まれるんです。「あの子が来るから私も行こう」、たったこれだけのモチベーションで小さなゴミ拾いのイベントや落書き消し、ちょっと大きなマルシェイベント、今日のこれも出来るんです。別にこれをしたからといって、まちが急に良くなるなんて思っていないです。

とあることをきっかけにやらざるを得なくなり足を突っ込んでしまった訳ですが、やり続けられるのは、お給料でもなく誰か上司に言われたからでもない。確かに社会は皆のもので、誰かがベンチを作らないとあそこにベンチは無いわけですし、あそこに木が植わっているのも誰かが意図して植えたわけです。だから、その意図するところにちょっとでも触れながら、わずかな力ですけれども何かやりながら、結果そういうマインドと一緒に共有できる仲間がいて、それが暮らしにつながっていることがいいな、というのが僕の答えです。

(尾崎) ありがとうございます。めげそうになる時はありませんか？

(奥原) 5月の19、20日でトランクマーケットがあり、ものすごく負担でもうクタクタです。だから「みんなで持とう」と、一生懸命声かけています。「少しは時間あるでしょう。全部持てとはいませんが、持てる荷物だけ持って。持てない荷物まで持ちちゃうと、腕ちぎれちゃうから持てないし、だけどあなたも住んでいるまちだよ、ここは」「僕だってそうだけれど、あなたもそうでしょう」、という話です。公助とか共助の話になるわけですが、少しだけ共助の感覚を皆が持ち、得意な荷物だけでも良いので少し持ってくれば良い。

クタクタでボロボロになる奴らが無残にもそこら辺に屍のように転がってるんです。若狭さんは全然くたばらない。昔からまちづくりやっていますけど、すごいなあと思います。客が来ないイベントも平気でやって、やりきります、やり続けます。本当にリスペクトしているんです。だからもっと戦略的にやれば良いとは思いますが、ただ戦略的にやっても、1部トークと一緒にですが仕組みやハードの話ばかりになる。

ここに来ている人で、どれだけプレイしているひとがいるかはわからないけれど、仕組みや制度だけでまちがうまくいくわけがないじゃないですか。行きたい所、買いたい物、美味しい物とか、そんな

くだらない話なんです。うっとりするとか涙することとか、ディズニーランドだって、ネズミは足2本で立つかという話、嘘ですよ。だけど、うっとりするんです。ああいう事を、「皆でこのまちを一生懸命いい意味で捏造する」ということを、皆で少しずつ持ってやるのが大事ですね。自分たちでそれを回すためには金を稼がなくてはいけないから、稼ぎながらできませんかという話ではないでしょうか。

そういうことをやっていく中で、仲間がいて出会って、変な話ではなく良質な恋をして、「やっぱりあの人がいるから、あの人に言われたから、だから行こう」と思えば、挫けずに、若狭さんのように「もうやるぞ！」みたいな、「うわ、まじか」という事が出来るのではないかと思います。

(田坂) これはもしかしたら拍手するところですね。

### 【会場拍手】

(宋) 私からも質問です。自治体の話や人の話がありましたが、民間企業・大手企業が広島にどのくらいいるかはよくわかりませんが、民間企業がエリマネに参画しようとしたときに、どういう関わり方をして欲しいと思っていますか？人なのか、資金なのか、広島の方々はどう考えますか？

(若狭) うちでいうと、紙屋町・八丁堀で今から何とかやりたいと思っているのですが、その分というよりはやはりお金です。あと問題は、事務局です。例えば、ここ（うらぶくろ）はまちづくり会社として立ち上げていますが、またこっちも何か作りたいたいと思っている時に、どこが中心になってやってくれるかということ。例えば、天神さんなら西鉄さんがドカンとやっていらっしゃるし、御堂筋ならここ、というところが欲しい。だから人、事務局的な人と、後は資金です。

(田坂) ありがとうございます。ちょうど良い切れ目ができたような気がします。

まずは、この壇上の4人に、フロアから刺激をくださった600人に感謝を述べたいと思います、ありがとうございます。皆さんと一緒に作ってきたといえるかどうか、というところですが、第1部でたくさんのお話提供いただき、大局観を握って、エリアマネジメントとは一体何か、そしてそれは広島や中四国を一体どう変えていくのか、ということについての60分を過ごしてきました。4つくらい重要な取り出すべきものがあつたかもしれません。

1つは、どうしてもセクターを分けて考えてしまうところがあります。行政たるもの、「ほら、やっぱり行政の人ってそうだよな」、「ほら、やっぱり仲良くやっていたのに人事異動でいなくなるんだよな」。人事異動は本人のせいではないのに、どうしてもセクターで見ます。企業の顔を見たら同じように皆さん「金をくれと」言ってしまうかもしれません。そうではなくて、こういう言葉がありました。「個人にとっての社会とは、まちとは、なんでしょう」、「(そこに) 生きた実感がありますか」。まちの中に生きた実感があるかないかを1つの基準に考えた時に、こう言われるわけです。「(私は) 広島で生まれて育て死のうとしています。生きた時間があつたのは家族と仕事仲間と、(でも) 特にまちには実感はありませんでした。」こう言って人が死んでいくとしたら、まちってちょっとあまりにも勿体なさすぎやしませんか。もしかしたらまちであることこそ、その人の個人としての生きた実感になる。

2つ目。そのために、例えばその人はこういう風に思うんですかね。『「ベンチがあつたほうがい

い」「ならそうしよう』』『「それは行政の責任だ」「議会を通せ』』。そういう、過去に作ってきた仕組みについて私たちはその通りになぞらえるのではなく、違うアイデアでやり方でベンチをもたらすことができるとしたら、それこそが、もしかしたら生きた実感になっていくのではないか。今の仕組みの話をするのではなく、新しい仕組みの話をしよう。なおかつ、仕組みだけでまちがうまくいくわけでは無い、「うっとりする」ということもまちの皆で捏造できたらいいですね。もしかしたら広島流のエリアマネジメント、あるいは中四国流のエリアマネジメントとは、「“うっとりする”をまちのみんなで作ること」。そのために実感したい個人が個人として、自分のセクターを動かしてでも参加してくる。面倒だけれど仲間となり、持てる荷物を担いあうこと。

3つ目。そのために私たちは、どうやら2つくらい「コツ」をあみ出さなくてはならないようです。それはビックアイデアか、小さなコンテンツかと聞かれたときにこう答える、「両方です」。それは、「ビックアイデアなく小さなコンテンツをやっても、目の前の事しかやっていない、あなたの方が勝手にやっているだけでしょ、と言われる」。だから小さなコンテンツには必ずビックアイデアでこれを続けていくことにするというコツ。「こんなことがこのまちの理想像だよ、ちゃんとそれを示す。それは自分のためではなく、それを示し、示すことによって賛同者が増えるという事のために示す。ビックアイデアだけでもダメで、それを小さなコンテンツに置き換えたら「今やるべきは何だろうか」、というふうには必ず小さなコンテンツとビックアイデアはセットで考えること。

4つ目は「市民はどうやってプレイヤーになるのか」。もしかしたら、「きっかけです」という事かもしれないし、もしかしたら行政か民間かと言う議論をするのではなく、人事異動を重ねて重ねても水道から出てくる水が止まったりはしないわけです。人事異動をしたから継続性がなくなったのではないのです。やはりどこかで、それは個人が個人の奥底に留めながら活動していたことで、本当のその個人にとっての生き甲斐にはなっていかなかったということではないですかね。「企業人として、どう？」ということを一語で語るのではなく、「あなたはどうか」ということで語るべきで、人と人のつながりが楽しいと言うことが、市民をプレイヤーにするための1つの回答となるでしょう。

ここから取り出せるものを4つ挙げるとすれば、「生きた時間という事」、「“うっとりする”ということを作ろうという事」、「小さなコンテンツとビックアイデアは両方から攻めるという事」、「人のつながりが市民をプレイヤーにしていくという事」。これら4つのコツが、広島のエリアマネジメントという言い方ができるのかもしれませんが。

やっとこの対話の場を作ることができました。そして、とにかくシナリオ抜きで話してみようよ、という事にトライしてくれた4人の私にとっての仲間に、皆さんからもう一度盛大な拍手をいただけたら幸甚です。

## 【会場拍手】

(田坂) 福岡の後藤さんが、恐らく僕に気を遣ってくださったのだろう、「田坂さんと頑張りました」と言うたびにちょっと涙が出てきました。後藤さんの魂胆というのは、いつも一緒です。フォーラムをした際に、僕が見ていたフォーラムは、最初は市役所の方も型通りの挨拶で済みますから、型通りの発言でというような、予定調和で終わらすはずだったのですが、そこに渦巻いたコンテンツが「これはいけるかもしれない」と言った瞬間に、「やります」とか、「頑張ります」という壇上で宣言をして終わらせることが結構ありました。どうやら我々は、フォーラムやシンポジウムに集う

ことにより、そこからエネルギーをもらい、その集めたエネルギーを誰かにつぎ込んでまちを動かそうという方向に進むと後藤さんは設計なさってきたのかもしれませんが。

今日は、宣言はしなくていいから、どこか心に留め置いて頂きたい。ここにはたくさん市の職員の方がいらっしゃっていると聞いております。今顔伏せた人が市の職員の人だと思います。何か刺さったのではないかと思います。でもどうか、「だから早く答えを出せ」と、皆さん、問い詰めないでいただきたい。追い詰めないでいただきたい。慎重に慎重にやって状況を変えなければいけないことが、市役所の中にはたくさんありそうです。ですので、その人は変えようとしてるんだということを信じてあげて、そこからお互いの人間関係が始めましょう。温度差は表面の行動だけで図るのではなくて、「本当はジレンマ抱えていますよね」、と寄り添うことからセクター横断が始まるのではないかと思います。

まずは、1部も含めましてたくさんの人に支えられて、多くの人々の努力でこのシンポジウムがここまで進行できたことという事に対して、本当にこれは広島が動こうとしている証拠の1つだ、と総括をして、このコーナーを終わりたいと思います。皆さん長い間お付き合いどうもありがとうございました。お疲れ様でした。